

ムケリオーネスとの関係、エクランのユリアヌスとの論争におけるアウグスティヌスのアフリカ性の問題などが取り上げられた。それに、アウグスティヌスがイスラム世界でどのように理解されたり、受け入れられたのか、彼の思想や著作がどの程度イスラム世界で翻訳されていたのか、などに関して、従来あまり知られていなかった面に関する研究発表がいくつかあり、興味深かった。

紙幅が尽きたので、以下注目を集めた発表の一部を挙げておく。

S. Lancel 「アフリカ性とローマ性の間。普遍性へのアウグスティヌスの道」、M. Coyle 「北アフリカのキリスト教におけるアウグスティヌスの自意識」、J. van Oort 「北アフリカにおけるアウグスティヌスとマニ教」、M. Cheikh 「イスラムにおける予定と自由意志」、M. Markus 「アウグスティヌスの神学におけるアフリカ性と普遍性」、M. Rudolph 「アラブ人アウグスティヌス」、M. Ben Mansour 「12世紀のマグレブにおけるアウグスティヌスの痕跡」、M. Bouchenaki 「アウグスティヌスとアフリカ性歴史とタガステ、ヒッポ、カルタゴの遺跡の研究から」、Z. Mahmond 「アウグスティヌスによる歴史の神学」。これ以外でも、G. Madec, Di Bernardino, B. Studer, W. Geerlings, A. Schindler, C. Lapelley, J. O'Donnell など、世界の代表的なアウグスティヌス研究者たちが参加しており、活発な議論がなされたので、極めて刺激的で、有意義な学会であった。

オーストラリアの教父研究

出村和彦

筆者は2001年度、ブリスベンのオーストラリア・カトリック大学 Australian Catholic University (ACU) の初期キリスト教研究センター The Centre for Early Christian Studies に、客員研究教授として一年ほど滞在する機会を得た。この研究所(以下センターと略す)の活動(より詳しくはホームページ www.acu.edu.au/Earlychr/ を参照のこと、以下 HP)を中心に、私が知る限りのオーストラリアでの古代中世哲

学関連の研究動向を報告したい。

建国百年の若いオーストラリアにおいて、古代中世の研究がどのようにあり得るかは、会員諸氏の疑問に思われるところであろう。研究者の数こそ比較的少ないものの、以下にその一端を紹介するように、多様な分野にわたり活発な研究が行われている。概して、当地では、西欧中世哲学研究プロパーよりは、古代後期からビザンツのキリスト教研究が盛んな印象を受けた。その理由として、オーストラリアが戦後、かつての白豪主義を捨てて、イタリア、ギリシア、東欧、西アジア、ベトナムなどから大量の移民を受け入れるようになったことがある。しかも、ゲッターや〇〇人街を作ることなく、市民として平等にいろいろな場所で隣人として生活しながら、自らの文化や信仰を大切にしているという現実がある。彼らのもたらした様々なカトリック、諸々の東方正教会の伝統や文化が共生していくそのような多文化環境のもとで、従前の英国国教会やアイルランドのカトリックの伝統ばかりでなく、その様々なキリスト教の源流にある教父の役割が現実にしたものとして受け止められるようになっていくことがこの国の教父学研究の第一の刺激となっていると言わなければならない。ACUはカトリック大学だが、国公立大学の一つであり、センターには、東方正教会研究者 Lawrence Cross 上級講師（ロシアカトリック司祭）やコプト語やアラビア語のキリスト教文書を専門とする Youhanna Nessim Youssef 博士（コプト教会信徒）がスタッフとして加わり、東西のエキュメニカルな協力が最初から前提とされている。不動の伝統を持つヨーロッパや教会教派の棲み分けがはっきりしているアメリカとは異なる、オーストラリアの独自の共生の視点が世界に貢献しうるところであり、彼らの持つ東アジアとの近さの感覚も私たちにとって学ぶべき点があると言えよう。

むしろ、その学問的水準の高さは、当地の伝統ある総合大学が、そもそも豊かな古典教育の素地を持っていたことに加えて、ヨーロッパの一流の学者が教鞭を執ることがまれではなかったことと、そこを巣立った優秀な学生で、さらに Oxford Cambridge などで優等の学位を取った研究者がこちらに帰って就職することによって維持されている。前者の例として、『ソロモンの頌歌 *Odes of Solomon*』のテキスト編注の第一人者 Michael Lattke 教授（クィーズランド大学）やアタナシオス研究の権威 Charles Kannengiesser 教授などがある。近年では、オリュンピオドロスのプラトン注釈の翻訳 (*Olympiodorus : On Plato's Gorgias*, Brill, 1998) の他、古代におけるプラトンの受容 (*Plato's First Interpreters*, Duckworth, 2000) についての新境地を開

きつつある Harold Tarrant 教授（ニューカッスル大学）や、マニ教研究の基本文献の一つである *Manichaeism in the Later Roman Empire and Medieval China*. (Tubingen : Mohr, 1992) を著した Samuel Lieu 教授（マッコーリー大学）、*Blackwell Dictionary of Eastern Christianity* (2001) の編者で、*Depicting the Word* (Brill, 1996) を世に問うているイコン研究者の Ken Parry 博士が、イギリスから移住してきている。

オーストラリア出身の学者としては、*The Emergence of Christian Theology* (1993)、*Irenaeus of Lyons* (2001) 他、オリゲネスまでの初期教父についてのたくさんの著作のある Eric Osborn 教授（ラトロープ大学名誉教授）やクリストモスの翻訳がある R.C. Hill 博士などが挙げられよう。現在の第一線をリードしている方々のなかで、センターの所長 (Director) の Pauline Allen 教授はその中心的学者である。彼女の D. Phil. (Oxford) は、*Evagrius Scholasticus The Church Historian* (Brill, 1981) として出版されており、その後 John Chrysostom を始め、Leontius Presbyter of Constantinople や Severus of Antioch などの説教を精査して、カルケドン前後の神学論争を、当時の歴史的状況、特に論争者の置かれた司牧的状況との関わりで再解釈する試みを精力的に展開してきている（'Severus of Antioch as Pastral Carer' *Studia Patristica* XXXV (2001) 参照）。彼女は、4 巻本の Quasten 『教父学』に続く *PATROLOGIA Dal Concilio di Calcedonia a Giovanni Damasceno I Padri Orientali* 第五巻 (2000) に 37 篇の記事を寄稿し、『ケンブリッジ古代史』第 14 巻 (2001) に、The Definition and Enforcement of Orthodoxy from 425-600 という重要な寄稿をしている後期ギリシア教父研究の第一人者である。また、同僚には Leuven の T. Van Bavel のもとでアウグスティヌス研究で学位を取った Raymond Canning 準教授（現在 *De Catechizandis Rudibus* の新訳準備中）がいる。長くライデン大学にあって、アレクサンドリアのフィロンやプラトンの『ティマイオス』の古代での受容の研究（*Philo of Alexandria and the Timaeus of Plato*, 1986 など）で世界をリードしてきた David Runia 教授も、今年からメルボルン大学に帰って教授に就任した。

こうして、彼らの指導のもとに、オーストラリアの大学でドクターを終えて、特別研究員や非常勤講師に就いている研究者は、毎年ヨーロッパや北米の学会に積極的に参加し国際的に存在感を増しつつある。アレン教授との共著で Reutledge の *The*

Early Church Fathers シリーズで *John Chrysostom* (1999) を出しているセンターの副所長の Wendy Mayer 博士は、世界のクリソストモス研究ネットワークの要めにおり、彼女の手によるビブリオグラフィが、HP (Crysostom の欄) に掲載されている。キプリアヌスやテルトリアヌスについての論考を一流の国際学会誌に次々と発表している Geoffrey Dunn 博士 (Reutledge の *The Early Church Fathers* シリーズで *Tertulian* を出版予定) や、アレン教授との共著で *Corpus Christianum Series Graeca* の一巻 *Vita Maximi Confessoris* (2000) を出版している Bronwen Neil 博士など、センターの研究者たちの活動が目立つ。

さて、アレン教授の主導のもとで、一世紀から八世紀にいたる古代キリスト教思想を、広い範囲にわたって共同で研究することを促進するために、1998年以來、実業中心の ACU の学部大学院教育から独立して、大学研究機関として認可されているのがこのセンター (本部はプリスペンの McAuley Campus) である。その活動の特徴は、1) 質の高い国際研究集会の企画運営、2) 地道な教父研究やテキストおよびその翻訳の出版、そして、3) 国際的な教父研究協力のネットワークセンターの役割を果たしていることにある。

第一の活動のメインは、三年ごとの Prayer and Spirituality in the Early Church Conference (第1回1996年メルボルン、第2回1999年シドニー) の開催である。オックスフォードで4年ごとの International Conference on Patristic Studies よりは小規模だが、4日間の日程で、これまでに国内のみならず、Elizabeth Clark, J. Kevin Coyle, A. Louth, John McGuckin, P.F. Beatrice, Brian Daly, Pamela Bright といった国際教父学研究集会の常連の重要メンバーが参加した質の高い発表 (国際レフェリー付きの論集 *Prayer and Spirituality in the Early Church* Vol.1 (1998), Vol.2 (1999) が出版されている HP Conferences & Publications 欄参照) と共に、日替わりでカトリック、アルメニア教会、コプト教会などの夕拝を分かち合い、典礼音楽コンサートやイコンの展覧会も同時開催されて、総合的にキリスト教の源流の靈性にふれる希有な機会となっている (筆者は加藤武教授と第二回に参加した)。2002年7月の第3回研究集会は Liturgy and Life をテーマに開催され、加藤信朗教授とともに筆者も参加予定である (詳細は中世哲学会のホームページのニュースにリンクしている HP の Conferences 欄参照)。特に今年は、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教という三つの一神教宗教の、古代中世での相互の関わりを検討し、礼拝や神秘思想につい

て共通に理解しあえる部分などについてそれぞれから一流の学者を招いて意見交換をする、初めての Inter-Faith Seminar がプログラムに取り入れられている。このことから、このセンターの視野の広さがうかがえよう。また、この国際研究集会に引き続いて、コプト教会神学校との共催で、St. Athanasius についての専門の Symposium が開催される。

センターは、東方諸教会の相互理解と一致の機会を与える Orientale Lumen Conference (ワシントン Catholic University of America で始められている) の Australia and Oceania 地域のエキュメニカル研究集会を2000年7月に開催した (HP Conferences 欄参照)。メルボルン大学の Robert Gribben 教授 (プロテスタント教会 Australian Uniting Church 牧師) の司会のもと、ローマ・カトリック、メルカイト・カトリック教会、アルメニア教会、コプト正教会、アッシリア教会などの大主教レベルの方々が一堂に会して、お互いの主張に耳を傾けていたのは印象的であった。

第二の地道な教父研究やテキストを出版していく活動は、Early Christian Series モノグラフシリーズとして、ここ二年間に、#1 *Proclus Bishop of Constantinople, Homilies on the Life of Christ*, by Jan Harnm Barkhuizen, #2 *Theodoret of Cyrus, Commentary on the Song of Songs*, by Robert C. Hill, #3 *The Hymn of the Pearl The Syriac and Greek Texts*, by Johan Ferreira, #4 *The Life of Polycarp*, by Alistair Stewart-Sykes が刊行され (HP Monograph の欄参照)、さらに幾編の続刊が印刷中である。この企画の特徴は、原稿を全世界から公募していることであり、商業出版の採算の難しいものでも、センターの国際編集委員会の査定が通ったものは、できるだけ低価格で出版しようという良心的な企画である。

第三の活動として、アレン教授が Internatinal Association for Patristic Studies (I.A.P.S.) / l'Association Internationale des Études Patristiques (A.I.E.P.) の事務局長を引き受けて、この学会組織が教父研究の推進に真に有効な機能を果たせるように改革をはかりつつあることが挙げられる。センターは国際的な教父研究協力のネットワークの中心になりつつある。関心のある会員諸氏は HP の IAPS/AIEP の欄をご覧になり、ぜひメンバーになられることをお勧めする。

以上が、センターの活動であるが、上述の教授たちの属するオーストラリアの諸大学の古典学科古代史学科哲学科などには、研究グループが形成されている。注目すべきものとして、シドニー北のマッコリー大学 Macquarie University の古代史学文

献資料研究センター The Ancient History Documents Research Centre (www.anchist.mq.edu.au 参照) における, Samuel Lieu 教授の研究グループの精力的な活動を挙げたい。特筆すべきは, ここは, ユネスコなどの後押しを得て, マニ教資料集成 Corpus Fontii Manichaeorum のプロジェクトの国際的拠点となっており, ギリシア語ラテン語はもとよりコプト語, シリア語, ウイグル語, 中国語などのマニ教文献の集大成やインデックスの編纂が進められていることである。

その他に, 中世関係では, シドニー大学中世研究センター The University of Sydney The Centre for Medieval Studies がある (www.arts.usyd.edu.au/departs/medieval 参照)。また, オーストラリアビザンツ学会 Australian Association for Byzantine Studies (HP other Links の欄参照) は, 三年ごとに研究発表大会を持ち活発である。

オーストラリアの研究者の心は, 世界にバランスよく開かれており, アレン教授をはじめ日本の研究状況にも大きな関心を寄せている人が多い。今後, 会員諸氏が積極的に交流応答するを期待したい。